2026年9月1日
T.Kobayashi

古事記に学ぶ その 30
雄略天皇崩御のあとはどうなる？

<1> 清寧（せいねい）天皇の始まりと終わり

●白髪大倭根子命（しらがのおおやまとねこのみこと）が、大和の伊波礼（いわれ）に甕栗（みかくり）の宮を造り、22代「清寧（せいねい）天皇」と名乗って國を治めた。
白髪大倭根子命は、21代雄略天皇と訶良比売（からひめ）の間に生まれた。前章では白髪命と言う名で登場していたが、ここでは正式名称で現れた。
甕栗（みかくり）の宮の場所は、JR 桜井線香久山駅の南東（奈良県桜井市吉備）で、この場所には現在は春日神社がある。
この天皇には大后はなく、御子もなかったので、天皇が亡くなった後で、天下を治めるべき御子がいなかった。日嗣の御子を探し求める動きの中で・・・・、

＊閑話休題（登場する人物のプロフィール）
市辺之忍歯別命（いちのべのおしはわけのみこと）は、ここまでの文中では市辺之忍歯命と言う名で登場していた。17代履中天皇の第一子で、雄略天皇の従兄になる。側近の者の讒言に乗せられた雄略天皇によって殺されてしまった。
市辺之忍歯別命の妹が忍海郎女（おしぬのいらつめ）である。（別名：青海郎女・飯豊郎女）
また、市辺之忍歯別命の遺児である幼い二人の御子、意富祁王（おおけのみこ）と袁祁王（をけのみこ）は、身の危険を感じて逃避し、針間の國の志自牟（しじむ）の家に身を隠して、牛飼い・馬飼いの使用人としてそこに住みついた。（古事記に学ぶ その 28）

山部（やまべ）の連である●小楯（をたて）が針間の國の長官として赴任した時、新居で祝宴を催した。そこへ、この地の志自牟（しじむ）という者が同席した。
宴もたけなわになり、一座の者が順に舞を披露することになり、志自牟（しじむ）の元で竈の火焚きをしていた少年二人にも順番が回ってきた。二人は互いに譲り合って、なかなか始まらなかったが、礼儀正しく譲り合う二人のやりとりに、集まったお客さん達は好感を持って見守った。
結局兄が先に舞うことになった。次に弟が舞い、のちに声を長く引く詠辞（ながめごと）を語った。
この語りの中で、自分が履中天皇の御子　市辺之忍歯別命の御子の一人であることを明かした。
宴を開いた小楯（をたて）は驚いて椅子から転げ落ちた。そして一座の客をすべて退去させて、二人の少年を左右の膝の上に乗せて、泣き悲しんだ。
そして、小楯（をたて）は仮の宮殿を造って二人をそこに住ませて、都に早馬を走らせた。
市辺之忍歯別命（いちのべのおしはわけのみこと）には●忍海郎女（おしぬのいらつめ）・別名飯豊王（いいとよのみこ）という妹がおり、葛城の忍海（おしぬみ）の高木の角刺（つぬさし）の宮に居た。
二人少年の叔母である飯豊郎女（いいとよのいらつめ）は、宮に二人を迎え入れた。

この兄弟がまだ天下を治める前の出来事だが・・・。
弟の袁祁王（をけのみこ）には、妻にしたいと思っている乙女がいた。この乙女は、菟田（うだ）の首（おびと）らの娘で●大魚（おうを）と言った。

ある日、平羣（へぐり）の臣の祖先である●志毘（しび）の臣が、男女が集まって歌を掛け合う「歌垣（うたがき）」を催した。この席で、志毘（しび）が乙女の手を握った。
袁祁王（をけのみこ）は、これを見て、負けずに歌垣に加わった。志毘（しび）の歌は、袁祁王（をけのみこ）を馬鹿にしたような内容の歌で、舌戦を思わせる歌垣になった。
志毘（しび）と袁祁王（をけのみこ）の歌の掛け合いは、夜明け近くまで続いて、その晩は別れた。
翌朝、意富祁王（おおけのみこ）と袁祁王（をけのみこ）の兄弟は、謀（はかりごと）を巡らした。
「早朝、役人たちは朝廷へ出勤し、昼を過ぎると志毘（しび）の家へ三々五々集まってくる。今なら志毘（しび）は疲れて寝ているに違いない。やるなら今しかない」
早速軍隊を集めてきて、家を包囲した上で討ち入り、志毘（しび）を殺した。

<2> 顕宗（けんそう）天皇の船出

さて、この二人の御子は、日嗣の御子になることについて譲り合って、なかなか結論が出なかった。
兄（意富祁王：おおけのみこ）は、弟（袁祁王：をけのみこ）が小楯（をたて）の新居祝いの宴席で名乗りを上げたことで展開が変わったことを高く評価しており、弟が國を治める地位に立つことを望んだ。
辞退しきれなくなった袁祁王（をけのみこ）は、天下を治めることに同意した。
かくして●袁祁之石巣別命（をけのいわすわけのみこと）は、23代の顕宗（けんそう）天皇となって、近飛鳥に宮殿を造って國を治めた。（古事記文中では、在位期間を八年間と記している）
顕宗（けんそう）天皇は、かつて大長谷命によって謀殺された父（市辺之忍歯別命）の亡骸の所在を探し求めていた。そこへある日、淡海の國から賤しい老婆が参上して、「亡骸を埋めた場所を知っている」と天皇に告げた。
老婆の言葉通り遺骨が見つかったので、蚊屋野（かやの）の東の山に陵を造って、韓俘（からふくろ）の子ども達に守らせ、のちに遺骨を大和へ移した。
天皇は近飛鳥の宮に戻ったのち、この老婆を呼び寄せて褒美として●置目老媼（おきめおみな）という名を与えた。そして宮殿で召し仕え、近くに住居も与えた。さらに宮殿の戸に大きな鈴を設置して、老婆に用がある時にはこの鈴を鳴らすようにした。
やがてある日、置目老媼（おきめおみな）が、「私ももう年なので、故郷の淡海に帰りたいと思います」と申し出ると、天皇は納得して、別れの歌を歌って送り出してあげた。

＊閑話休題（「古事記に学ぶ その 28」に遡って見ると・・・）
天皇の父（市辺之忍歯別命）の陵の守り役として託されたのは、韓俘（からふくろ）の子ども達。
韓俘（からふくろ）は、淡海の佐佐紀の山の君の祖先で、「淡海の久多綿（くたわた）の蚊屋野には鹿などの狩の対象になる獣が沢山いますよ」と大長谷命に狩の進言をした。この進言を受けて大長谷命は、市辺之忍歯別命を誘って狩に出かけたのだが、大長谷命は、側近の讒言に乗って市辺之忍歯別命を殺してしまった。この事件の後で大長谷命は、21代の雄略天皇となった。
今ここに生まれた23代の顕宗（けんそう）天皇は、21代の雄略天皇に殺された市辺之忍歯別命の遺児である。

<3> 顕宗天皇の怨念

顕宗天皇（けんそう）がまだ袁祁之石巣別命（をけのいわすわけのみこと）だった頃、父である市辺之忍歯別命が殺されて、身の危険を感じて兄弟で逃げた時のこと。（古事記に学ぶ その 28）
山城の國の苅羽井（かりはい）まで逃げて、一息ついて乾飯（ほしいい）を食べている所へ、眼のふちに入墨をした老人が現れて、乾飯を奪い取った。

何者かを尋ねると「山城で猪を飼う仕事をしている●猪飼（いかい）だ」と答えが返ってきた。
この後、兄弟は針間の國まで逃げて、志自牟（しじむ）の家に身を隠した。
「乾飯を奪った男」は巧みに行方をくらましていたが、人を使って探させていたところ、所在が分かった。男を都へ呼び出して、飛鳥河の河原で切り殺し、猪飼の一族の者たちは脚の筋を切った。
天皇は、父を殺した雄略天皇（大長谷命）を深く恨んでおり、可能ならば魂にでも仇を報いたいと思っていた。ある日、雄略天皇の陵を壊してしまおうと思いつき、人を手配した。
これを耳にした兄の意富祁王（おおけのみこ）は、
「陵を壊すのに他人を使ってはいけません。私にお任せください」と言って、自分で出向いて行った。
そして、河内の多治比（たじひ）まで行き、陵の近くの土を少しだけ掘って持ち帰った。
天皇は、兄があまりにも早く帰ってきたので、詳しい経緯を尋ねた。兄の返答はこうだった。
「あの雄略天皇は父の仇には違いないが、父の従兄弟でもあり、天下を治めた天皇でもあります。
今、父の仇だということばかりにとらわれて元天皇の墓を破壊してしまえば、後世の人が私たちを謗るでしょう。とは言っても父の仇は報いなければ気が済みません。それで、私は墓のそばから土を少し掘ってきました。これだけ恥を見せてやったのですから、志のあるところを後世の人に示すには充分でしょう。」 弟（顕宗天皇）は兄の説明に納得して同意した。
顕宗天皇が崩御した後は、兄の意富祁命（おおけのみこと）が24代仁賢天皇として國を治めた。
顕宗天皇は8年間在位して38歳で崩御した。陵は片岡の石坏（いわつき）の岡に造られた。
現在の地図で確認すると、奈良県香芝市西今市である。

以上

系図で見る24代天皇誕生までの流れ

